

(第三種郵便物認可)

美術

野中 耕介

この時評を担当してずいぶん長くなるが、今もって毎月新鮮な気持ちで原稿用紙に向かうことができている。といえば聞「えはよいが、同時に毎回、まるで針のむしろに座っているかのような苦悶の連続でもある。

なぜなら時評「批評」を書くという行為は、たとえそれが一地方紙のささやかなスペースであるにせよ、批評とは何か、その機能と存在理由とはいかなるものなのかという、遠大かつ深遠な問題について、否応なく向き合わなければならぬことだからである。

県内文化

美術―芸術における批評は、一体どうあるべきなのか。

『美術史の辞典』（ポール・デュロ、マイケル・グリーンハルシュ共著）によれば、「最良の美術批評とは」質や達成度という観念的な基準で美術作品を評価しようとする公平無私

作品と人間知性の対話

な活動であり、それは「相互に影響し合うもので、作品と人間知性の対話である」とする。

まさに正鵠を得た解説であり、ひとつの理想とすべきものだと思いが、この「観念的」な「基準」というのが厄介で、「観念的」なもの、そしてその「基準」は、「私」（私欲というよ

り、ごく個人的な嗜好という意味で）の独断にすぎないのではないか、という思いが私の中に常にあ

る。そもそもそうだとしたら、「公平」など到底望み得ないのではないか。しかし今にして思えば、本稿を通じて佐賀の美術を見つめ

ることは、私にとって皮肉にも、この「私」を確認する作業ではなかったのかとも思っているのである。

これまで本稿でさまざまに郷土の美について言及してきた。今それらを読み返してみて、それらどれも結局は「私」を超えた言説になり得ていないことに落胆するが、私の美の感性、

その淵源は、まぎれもなくここ故郷で育まれたものであり、もし、だからこそ持ちえた視線があり、紡ぐことができたことばがあったとしたら、そこにいくばく

かの希望と夢を持つしかないのだと思っている。作家の側からしてみれば、丹念な技術評こそが望

まれる批評であったのかも知れない。しかし私にとつての批評とは、技術によってどのような美が生まれ、どのような風景、そして思想がもたらされたのかを考

えることであり、それこそが「作品と人間知性の対話」ではないかと、私は信じているのである。

(県立美術館学芸員)